

テニュアトラック制について

テニュアトラック制とは

公正で透明性の高い選抜により採用された若手研究者が、審査を経てより安定的な職を得る前に任期付の雇用形態で自立した研究者として経験を積むことができる仕組みです。

文部科学省のテニュアトラック制に関する方針

若手研究者が自立して研究を実施できる環境を整備することによって、優れた人材を育成し、我が国の科学技術のレベル向上を図るため、平成18年度から「若手研究者の自立的な研究環境整備促進事業」を開始し、それを発展させて平成23年度からは「テニュアトラック普及・定着事業」を開始しました。第4期科学技術基本計画(平成23年8月)は「テニュアトラック制の導入を進めることにより、テニュアトラック制の教員の割合を、全大学の自然科学系の若手新規採用教員総数の3割相当とする」よう提言しています。

テニュアトラック制に求められる要件(文部科学省)

1. 公平で、透明性のある国際公募を行って選考・採用する
2. テニュア審査を行って、テニュア職に就く
3. テニュアトラック期間中に自立した研究者としての経験を積むことができる(自立的な研究環境を整備する→TT期間終了時に、自力で高度の研究を遂行できる、学外の競争的資金を獲得できるよう能力が身につけていることが重要)

宮崎大学のテニュアトラック制

宮崎大学は、平成21年度に「宮崎大学型若手研究リーダー育成モデル」が文部科学省・若手研究者の自立的な研究環境整備促進事業に採択され、4つの異分野融合研究領域からなるIR推進機構を設置しました。さらに平成23年度に文部科学省・テニュアトラック普及・定着事業に採択され、各学部の基盤教育研究分野を強化するためテニュアトラック推進機構を設置しました。

本学における若手育成のための施策(自立するが、孤立しない支援体制)

- 独立した研究室の確保、スタートアップ経費・年間研究費の配分
- トロイカサポーター(学内2名、海外研究者1名)によるメンター制⇒研究への指導・助言
- 研究リーダー、コーディネーターを配置⇒自立的な研究環境の確保
- 国際性の涵養⇒IRO特任助教:4名が短期海外研究、国際学会での発表30題
- リーダーシップの育成⇒セミナー・発表会等の企画を奨励。IR/TT Week(研究成果報告会)の開催
- 研究活動の奨励⇒H24年度実績(別表を参照)
- 研究交流・情報交換の促進⇒合同セミナーの開催
- 自立性の促進(外部資金獲得の奨励)⇒70%の教員が科研費獲得
- 大学院生指導、学部・大学院での講義担当⇒全員が講義を担当



世界を視野に、地域から始めよう

テニュアトラック期間のスケジュール・若手研究者の研究

	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目
国際公募	着任・研究開始	年次評価	中間評価	年次評価	テニュア審査 →準備期間 (セーフティネット)	学部へ 配属

中間評価項目 (a)到達目標の達成度に対する自己評価、(b)リーダーシップ(研究ネットワークの形成を含む)、(c)研究の自立性(外部資金の獲得状況を含む。)、(d)研究業績、(e)国際性、(f)学生・大学院生への研究指導・教育能力

テニュア審査項目 上記(a)～(f)+(g)将来への展望(宮崎大学の発展にどう貢献するかの抱負を含む)

IR推進機構(IRO特任助教)			テニュアトラック推進機構 (テニュアトラック教員)		
第Ⅰ分野 ゲノム解析を基盤とした病原性及び有用性微生物研究(人獣共通感染症を含む)	阪口 義彦	第Ⅲ分野 バイオマス・エネルギー資源変換の基礎研究及び実用化	井上 謙吾	医学系TT准教授 (発生・生物学)	本多 新
	Urbanczyk Henryk		田島 大輔	医学系TT助教 (物質科学)	和田 啓
	井口 純		鈴木 秀俊	農学系TT助教 (野菜・花き園芸学)	稲葉 靖子
第Ⅱ分野 新規生理活性ペプチドの探索・基礎研究及び臨床応用	井田 隆徳	第Ⅳ分野 高品質な農水畜産物の生産及び機能性食品の開発	河野 智哉	工学系TT助教 (バイオソフウェア)	山子 剛
			富永 るみ	農学系TT准教授 (畜産学)	(公募中)

平成24年度 IRO特任助教の活動実績(平均)

TT推進機構に所属する教員は研究期間が短いため今回はデータを割愛しました

大項目	小項目	一人平均
研究業績 (論文)	論文発表数	1.9報
	そのうち筆頭・責任著者論文数	1.2報
	掲載雑誌のインパクトファクター	全論文の平均 3.13
研究業績 (学会発表)	学会発表	9.2題
	そのうち発表者となったもの	3.1題
	国際学会での発表	1.1題
教育業績	大学院講義科目	1.9科目
外部資金獲得	外部資金獲得額	377万円
	そのうち科研費獲得額	167万円